

今回の統一地方選挙の主役は、少なくとも名古屋と大阪では地域政党で、ボク達は、逆風下の防戦に追い立てられる。この10年、政権交代に全力投球してきたが、その結果が予想以上に芳しくなかったのだから、逆風は致し方ない。地方選挙の論点は、入りを増やし、出を減らすに尽きるが、地域政党が導こうとする争点は明快だ。「経済戦争」は熾烈を極め、日本は今や「本土決戦」さながらに追い込まれているが、国はあてにならないから、大都市が、生き残りをかけて「戦時システム」に変わる。かって戦時下で生まれた東京都の特別区をモデルに、大阪都・中京都を創るというわけだ。これで経済戦争に馳せ参じ、入りを増やす。出を減らすとは、いわば自民政権と民主党政権の「無策」に乗じて、「論より実行」で、議員や公務員の人件費を減らす、この一点だ。何とも扇情的だが、これがウケている。投票日までの僅かな時間で、有権者が冷静さを取り戻してくれるか心配だ。ボクは、大阪都か自治体連合かは争点には早すぎると思うから、市民の関心は、出を「減らす」に傾くと思う。

小さな話で恐縮だが、ボクは、生活保護の論争でも、「減らす」より「活かす」と主張してきたし、公園の指定管理者選考でも「公園を活かす」と言ってきた。自治体の委託業務の入札では、価格競争より「雇用を競う」で「活かす」のが総合評価入札制度だと提唱してき



「公務員を減らす」VS「公共事業を活かす」

た。公共が調達する事業は65兆円市場と言われている。これを雇用に、福祉に、教育に、環境に「活かす」自治体改革こそが、議員や公務員の人件費を「減らす」という地域政党への反論だと思う。

議員や公務員への反発を煽るのは「大衆迎合主義」だと一蹴してはダメだ。そう思う市民感情を無視してどうするの、実際ちょっと厚遇ではないかとも思う。しかし、人件費を減らすだけでは「人任せ」は変わらない。これからの地方自治は、「やってあげる、やってもらう」ではなく「やっていこう」に変える。まずは、自治体に任してきた仕事を見直し、公務員に独占させない、また価格競争だけにもしない、社会的価値を競う入札制度を導入することだ。そして、自治体が持っている施設や土地の

使い方を変えることだ。公共だけにしない、売ってしまうのも要注意。特別養護老人ホームの待機者も多いし、就労支援の場も不足しているのだから、土地や施設を貸して、市民事業体などにやらせたら良い。

「分相応」と言うと随分失礼かもしれないが、大阪都構想など大きな話はゆっくりやろう。もっと身近に自治体の4年間の経営を論じあおう。ボクは、「減らす」より「活かす」で、議員も公務員も、そして市民も、痛みを分かち合う、そういう選挙戦にしたいと思っている。

㈱ナイス代表取締役 富田一幸



hidarimakiの  
この逸話

# 切腹



監督：小林 正樹  
脚本：橋本 忍  
撮影：宮島 義男  
音楽：武満 徹  
キャスト：仲代 達也  
石浜 朗  
岩下 志麻  
丹波 哲郎  
三国 連太郎  
製作：1962年松竹  
モノクロ 133mm  
脚録：松 竹

この映画は主人公の回想で語られる。黒澤監督作品「羅生門」(50年)もまた同様の形式で描かれていたが、複数の登場人物たち自らの事情を語るいわば三人称に対し、「切腹」は主人公と家老の回想対話で展開される。「羅生門」の“真実”は藪の中の話で終わったが、「切腹」は主人公の苦悩の事実と法廷劇のような味わいをみせ、武士階級の“嘘”を晒していく構造となった。同監督の「上意討ち」(67年)と対をなす作品だが、「切腹」には貧しさの悲哀が漂っているだけ残酷だった。

家光が世の寛永年間、浪人津雲半四郎が伊井家藩邸を訪ねる。生活苦の絶望から屋敷玄関前を借り切腹させてほしいと申し出る。実はこの頃、このようにして食い詰めた浪人たちが切腹の気もなく、あわよくば仕官を求め藩邸から金をせしめていた。藩邸家老の斉藤は、以前同様にして切腹を申し出た若い浪人千々岩求女の事を浪人に話した。斉藤は千々岩を屋敷の庭に通し、望みどおり作法にのっとり切腹させた。

しかしそれは押売り浪人たちへの強引で陰惨な見せしめのための儀式であった。

庭に通された津雲は、ここで切腹の介錯人を指名する。それら3名はなぜか全て病欠であった。そして惨殺同様にして自死させられた男こそ津雲の娘婿であったことが明らかにされる。津雲は、非道で仮借ない幕府の改易に、「明日はわが身」を居並ぶ藩士たちに聞かせながら、極貧のうちに愛する家族を病死させていった無念を回想する。

「切腹」を見たのは封切りよりずっと後、広告代理店の下請けで乏しい金を稼いでいた頃だ。担当者らは総評系労組員で、僕らに低賃で徹夜労働を強いながら文句を言わせなかった。「それは無理」なんていえば、「やめてもらってええで」が常套句で、つまり僕らの生殺与奪は組合員が握り、何のことはない労使連帯の末端搾取だった。未組織な連中など眼中になく、しかしひとたびストに入ると“労働者の仲間たち”と、その場限りの体のいい仲間扱いはペテンだった。また組合や議員が僕に仕事を依頼するも、未払いが当然の態度に怒り心頭し「誰のための組合や」と幾度か大声を張り上げたこともある。

津雲は「衣食に窮したといえ、(娘婿が)当家の場を借りて切腹するは言語道断。しかし事情を聞くのが人情」と言う。斉藤が答える。「自ら判断した切腹を全うすべし」。ここには武士道(法解釈)としてのディベートが展開される。いわばゴネ得、逆恨みを通して階級社会をからかいながら情に訴える。組織は情の世界など通じぬ世界だから、あとは力任せに末端をぶった切るしかない。これは武士道に名を借りた反権力と復讐の映画であった。ぶった切られ役の僕は、この頃から主義者幻想を棄て始めていく。

hidarimaki

